

第一章 白ウサギ

ある晴れた午後のことです。

アリスと彼女のお姉さんは、川のそばに腰かけています。

アリスのお姉さんは、絵のまったくない本を読んでいます。

「絵のまったくない本なんて、私は好きじゃないわ」とアリスは思います。

アリスは眠たそうです。

ちょうどそのとき、アリスは白いウサギを見ます。

ウサギは時計を見て、「遅れちゃう！」と言います。

「何て不思議なの！」とアリスは思います。

「時計を持ったウサギなんて！」

アリスは芝生を横切って、大きな穴の中へとウサギを追いかけます。

アリスはゆっくりと穴の下へと落ちます。

そして落ちるのが止むと、立ち上がります。

アリスは辺りを見回します。

アリスはウサギをもう一度目にし、ウサギを追いかけます。

ウサギは、ドアのたくさんあるホールを走り回っています。

そして、小さな鍵の置いてあるガラスのテーブルが見えます。

アリスはその鍵を手にとってドアを開けようとしませんが、開けられません。

それから、とても小さなドアが見えたので、それを開けます。

きれいな庭があります。

「あの庭に入りたい」とアリスは思います。

「けど、私ったら大きすぎだわ」

アリスがガラスのテーブルの上に鍵を置くと、テーブルの上に瓶が見えます。

瓶には「飲んで」と書かれています。

アリスは瓶を手に取り、全部飲んでしまいます。

「あら、何て不思議なの！」とアリスは言います。

「さあ、とても小さくなったから、あの庭に入ることができるわ」

しかし、ドアは閉まっているし、鍵はテーブルの上にあります。

今やアリスは小さすぎて、鍵を取ることができないのです！

アリスはひどく悲しくなって、泣き出します。

テーブルの下に、小さなガラス箱が見えます。

箱の中には「食べて」という言葉の書かれたケーキがあります。

「食べちゃおう」とアリスは言います。

「もしかしたら大きくなって、テーブルから鍵を取ることができるかもしれないわ」

アリスはケーキを食べますが、何も起こりません。

すると突然、アリスは大きくなります。

「これで鍵を取ることができるわ」とアリスは思います。

アリスは鍵を取って、庭へと続くドアのところに行きます。

しかし、大きすぎて中に入れません！

アリスは座り込み、また泣き出します。

アリスの涙で大きな池ができます。

突然、もう一度白ウサギが見えます。

白ウサギは可愛らしいジャケットを着ていて、片方の手には白い手袋を、もう片方の手には花を持っています。

「ああ、遅れているから公爵夫人がお怒りになるだろうな」と白ウサギは言います。

「すみません、ウサギさん…」とアリスは言います。

白ウサギは怖くなって、逃げ出します。

彼の白い手袋が床に落ちます。

アリスは自分の手を見て、不意に白ウサギの手袋の片方をはめます。

「あら、やだ」と彼女は言います、「また小さくなっていくわ！ 私に何が起きているの？」

アリスはまた小さくなって、突然、池の中へと落ちます。

「私は海の中にいるんだわ」とアリスは思います。

しかし、それは海ではなく、アリスの涙でできた池です。

アリスのそばを泳いでいるネズミが見えます。

「こんにちは、ネズミさん！」と彼女は言います。

「疲れちゃったの。この池から出たいな」

ネズミは答えません。

「ひょっとすると、英語が分からないのかもしれないわ」とアリスは思います。

「フランス語なら分かるかも」

「Où est ma chatte? (私のネコはどこですか?)」とアリスは尋ねます。

これは、アリスが持っているフランス語の本にあった最初の文です。

ネズミは怒って、「ネコなんて好きじゃない！ 僕の家族もネコが好きじゃないんだ！

僕はネズミだぞ！」と英語で言います。

ネズミは泳いで行って、アリスはその後を追いかけます。

第二章 青いイモムシ

程なくして、その池には他の不思議な動物たちがいます。

アヒルにドードー鳥、オウム、そして赤ちゃんワシです。

アリスが池から出ると、動物たちはアリスの後を追います。

「僕たちみんな、ずぶぬれだね」とドードー鳥は言います。

「かけっこをして、乾かそうよ！」

「それはいい考えだね」とオウムが言います。

アリスと動物たちは、かけっこをして乾かします。

かけっこの後、「このかけっこに勝つのは誰だろう？」とアヒルは尋ねます。

「みんな勝つんだよ、だからみんな賞品がもらえるんだ」と、ドードー鳥が言います。

「それで、アリスがその賞品をくれるんだって」

「でも、賞品なんて私、持っていないわ」と、アリスは思います。

アリスは、どうしたらいいのかわかりません。

アリスが自分のポケットに手を入れると、お菓子箱を一箱見つけます。

「ここに、みんなのためのお菓子がいくらもあるよ」とアリスは言います。

アリスはそれぞれの動物に、一個ずつお菓子をあげます。

「アリスも賞品をもらっているはずだよ」と、ネズミが言います。

「もちろんさ」とドードー鳥が言います。

「アリス、君は賞品に何をもらったんだい？」

「私、この箱しか持っていないの」とアリスは言って、空っぽのお菓子箱をドードー鳥にあげます。

「いいね！」とドードー鳥は言います。

「ここに君の賞品があるよ、アリス。美しい箱さ」

「何て不思議なの！」とアリスは思います。

アリスはドードー鳥を見て、「ありがとう」と言います。

動物たちは立ち去って、アリスだけになります。

何か音が聞こえて、白ウサギが見えます。

「公爵夫人さま！」と白ウサギは言います。

「公爵夫人さまがお怒りになる。僕の手袋はどこだ？」

アリスは辺りを見回します。

すると突然、何もかもが違う様子になって、アリスは田園地帯にいます。

白ウサギはアリスを見て、「メアリー・アン、ここで何をしているんだ？ 家まで急いで行って、私に白い手袋を持って来ておくれ！」と言います。

「白ウサギは、私を召使いだと思っているのね」とアリスは思います。

アリスは白ウサギの家を走って行って、白ウサギの手袋を手に取ります。

すると、テーブルの上に一本の瓶が見えて、「私がここで何かを食べたり飲んだりするたびに、面白いことが起こるんだわ」と思います。

アリスがその瓶を飲むと、大きくなり始めます。

今や、アリスはとても大きくて、ウサギの家の窓から、片方の手を外に出します。

「メアリー・アン！ お前はどこにいるんだい？」と白ウサギは尋ねます。

「僕の手袋はどこ？」

白ウサギは、自分の家のドアを開けようとしています。

しかし、アリスの腕がドアにつかえているので、開けられません。

白ウサギは庭師を呼びます。

「パット！ パットや！ どこにいるんだい？」

「私はここにいますよ、ご主人さま」とパットが言います。

白ウサギの家の近くには他の動物たちもいて、動物たちは白ウサギを助けたがっています。

「こっちへ来て、僕を助けておくれ」と、白ウサギは怒りながら言います。

「パット、窓の中にあるあれは一体何だい？」

「あれは手です」とパットは言います。

「手だと！」と白ウサギは言います。

「お前は何を言っているんだ？ よくお聞き。僕たちは家を燃やさなくちゃいけない！」

「何ですって！」とアリスは叫びます。

動物たちは少しの間、静かになります。

それから、動物たちは窓の中へと石をいくつか投げ入れます。

石は小さなケーキになります。

アリスはいくつかのケーキを食べて、小さくなります。

アリスはうれしくなって、家から走って出ます。

動物たちはアリスを捕まえようとしますが、アリスは森の中へと逃げます。

アリスは、森で大きなキノコを見ます。

キノコのとっぺんには、眠そうなイモムシがいます。

イモムシは、長いパイプをふかしています。

「お前は誰だい？」と、イモムシは静かに尋ねます。

「わ…分からないわ」とアリスは言います。

「私の大きさはね、しょっちゅう変わるの。今はとても小さいのよ」

「俺には分からないな」と、青いイモムシは言います。

「私には説明できないわ」とアリスは言います。

「イモムシさん、私に例を挙げさせてね。ある日、あなたはチョウチョウになるでしょう。

それって不思議じゃないかしら？」

「いいや、そんなのちっとも不思議じゃないね」とイモムシは言います。

「で、お前は誰なんだい？」

「まず、私はあなたが誰なのか教えてほしいわ」とアリスは言います。

「どうして？」とイモムシは尋ねます。

アリスは、その質問に答えることができません。

アリスは怒って、歩いて立ち去ります。

「戻っておいでよ！」とイモムシは言います。

「俺は君に話したいことがあるんだ」

アリスはイモムシのところに戻って、イモムシを見ます。

「絶対に怒ったりしちゃいけないよ」とイモムシは言います。

「言いたいことはそれだけ？」と、アリスは怒りながら尋ねます。

「いいや」とイモムシは言います。イモムシはパイプをふかして、そしてキノコから降ります。

「このキノコの片側を食べれば大きくなるし、反対側を食べれば小さくなるよ」

アリスはそのキノコを見て、「キノコのどちら側を食べたらいいのかしら？」と考えます。

アリスは両側からかけらを取り、最初にとった方のかけらを食べます。

すると突然、アリスはとても小さくなります。

アリスが反対側のかけらを食べると、アリスの首が長く伸びます。

そして、また反対側のかけらを食べると、ちょうどいい大きさになります。
これでアリスは満足です。

第三章 チェシャ猫

アリスは森の中を歩きます。

アリスはすてきな庭と、小さな家を見ます。

「私は大きすぎるわ」と彼女は思います。

「私はあの家には入れない。キノコのかけらを食べて、もう一度小さくならなくちゃ」程なくして、アリスは**23**センチメートルくらいの身長になります。

すると突然、召使いが森から出てきて、その小さな家に行きます。

召使いの顔は、魚のようです。

別の召使いがドアを開けますが、その顔はカエルのようです。

魚の召使いは、手に大きな手紙を持っていて、「公爵夫人さまへ。クローケーをしようという女王さまからの招待状です」と言います。

カエルの召使いは、「女王さまから！ クローケーをしようという公爵夫人さまへの招待状です」と言います。

「何て不思議な召使いたちなの！」と、アリスは笑いながら言います。

アリスはその家に行き、「入ってもいいですか？」と言います。

「ともかくドアを開けて、中にお入りなさい」と召使いが言います。

すると、アリスは公爵夫人を見ます。

公爵夫人は赤ん坊を腕に抱きながら、小さな椅子に座っています。

台所には料理人がいます。

料理人は、スープを作っています。

「スープにコショウが多すぎるわ」とアリスは思って、くしゃみをします。

そして、公爵夫人がくしゃみをすると、赤ん坊がくしゃみをします。

しかし、料理人と大きなネコは、くしゃみをしません。

ネコは料理人の近くに座り、ほほ笑みます。

アリスは公爵夫人に、「あなたのネコはどうしてほほ笑むの？」と尋ねます。

「だって、それはチェシャ猫ですもの」と公爵夫人は言います。

「チェシャ猫は皆、ほほ笑むものよ、あなたは知らないの？」

「いいえ、知りません！」とアリスは言います。

「あなたって、あまり知らないのね」と公爵夫人が言います。

すると突然、料理人がお皿やコップや鍋を、公爵夫人と赤ん坊にめがけて投げつけ始めます。

ひどい騒音で、アリスは怖くなります。

「ああ、気を付けてください！」とアリスは言います。

「かわいそうな赤ちゃん…！」

「赤ちゃんについては考えないでちょうだい」と公爵夫人は言います。

「それは私の赤ちゃんなの！」

公爵夫人は赤ん坊のために歌い始めますが、突然、公爵夫人は赤ん坊をアリスに投げてよこします。

「ほら、赤ちゃんを受け取ってちょうだい！」と彼女は言います。

「私は行って、女王さまとクローケーをして遊ばなきゃ」

公爵夫人は、家から走って出ます。

料理人は公爵夫人にお皿を投げつけますが、お皿は公爵夫人には当たりません。

アリスは、赤ん坊と一緒に外へ出ます。

赤ん坊は奇妙な音を立てます。

アリスが赤ん坊を注意深く見ると…それはブタの赤ん坊です！

「ブタだわ！」と、アリスは驚いて言います。

アリスがすぐに赤ん坊を降ろすと、赤ん坊は森の中へと走ります。

ちょうどそのとき、アリスは木にチェシャ猫を見ます。

チェシャ猫はアリスを見て、ほほ笑みます。

「こんにちは、チェシャ猫さん」とアリスは言います。

「私はこれから、どこに行ったらいいのかしら？」

「ふむ、君はどこに行きたいんだい？」とチェシャ猫は尋ねます。

「わ…私には分からないわ」とアリスは言います。

「君は、右手にあるその道を行けるよ、そうすれば君は帽子屋を訪ねられるんだ」とチェシャ猫は言います。

「それか、君は左手にあるその道を行けるよ、そうすれば君は三月ウサギを訪ねられるんだ。問題はないのだけれどね。二人とも気が狂ってるんだ」

「あら、まあ」とアリスは言います。

「私、気が狂ってる人たちなんて訪ねたくないわ」

「それじゃあ、君は間違った場所にいるんだよ」とチェシャ猫は言います。

「僕たちはみんな、ここでは気が狂ってるのさ。君だって気が狂ってるんだよ」

「私が気が狂ってるって、どうやってあなたに分かるの？」とアリスは尋ねます。

「君はここにいる」とチェシャ猫は言います。

「だから、もちろん君は気が狂ってるのさ」

「君は今日、女王さまとクローケーをするつもりなのかい？」とチェシャ猫は尋ねます。

「いいえ、私は招待状をもらっていないもの」とアリスは言います。

「僕はそこにいるつもりだよ」とチェシャ猫は言って、不意に立ち去ります。

それからチェシャ猫は戻って来て、「赤ん坊はどこにいるんだい？」と尋ねます。

「それは赤ちゃんじゃないのよ」とアリスは言います。

「それはブタなの！」

「ええ！」とチェシャ猫は言って、もう一度立ち去ります。

アリスは三月ウサギの家へ行きます。

「何て大きな家なの！」とアリスは考えます。

「けど、私はとても小さいわ」

アリスがキノコの反対側のかげらを食べると、アリスは大きくなります。

第四章 お茶会

その家の前には、大きなテーブルがあります。

三月ウサギと帽子屋がお茶を飲んでいきます。

ヤマネは、二人の間のテーブルの上にいます。

三月ウサギと帽子屋はアリスを見ると、「スペースがないんだ。スペースがまったくくない！」と言います。

「けど、スペースならいっぱいあるわ」とアリスは言うと、大きな椅子に座ります。

帽子屋は自分の時計を見て、「今日は何曜日だ？」と尋ねます。

「私は月曜日だと思うわ」とアリスは言います。

「私の時計では水曜日だよ」と帽子屋は言います。

三月ウサギは、彼の時計を彼のお茶の中に入れます。

アリスが驚きます。

「三月ウサギは何をしているのだろう？」と彼女は思います。

それから、三月ウサギは時計を外に取り出して、それを見ます。

アリスは三月ウサギの時計を見て、「何て不思議な時計なの！」と言います。

時計は、その月のその日を示していますが、時間を示してはいないのです。

「君の時計は年を示すのかい？」と帽子屋は尋ねます。

「もちろん示さないわ」とアリスは言います。

「だって、長いこと同じ年なんだもの」

「ふむ、私の時計と同じだな」と帽子屋は言います。

「ここではいつも6時なんだ」

「もっとお茶を飲みなよ」と三月ウサギは言います。

「ありがとう、でも私、お茶がまったくくないわ」とアリスは言います。

「私はどうやってもっと飲むことができるの？」

「ああ」と帽子屋は言います。

「君はいつだって、無よりも多くを持てるんだよ」

アリスは混乱して、怒ります。

アリスはテーブルから立ち上がると、木々の間を歩いて、歩き去ります。

帽子屋が、ヤマネをお茶のポットに入れようとしています。

「何てばかげたお茶会なのかしら！」とアリスは思います。

アリスが森の中を歩いていると、木の中にドアが見えます。

アリスがそのドアを開けると、ガラスのテーブルのあるホールがもう一度見えます。

「今度こそ、その庭に入りたいわ」とアリスは考えます。

アリスは鍵を取って、そのドアを開けます。

アリスがキノコのかげらを食べると、小さくなります。

それからアリスは、かわいらしい花々や噴水のある美しい庭の中へと歩いていきます。

庭のドアの近くには、大きなバラの木があって、アリスは3人の庭師に会います。

しかし、庭師たちは人間ではありません。庭師たちはトランプのカードで、彼らのそれぞれが、頭と手足を持っています。

庭師たちは白いバラを赤く塗っています。

アリスは庭師たちを見て、「こんにちは、私の名前はアリス。あなたたちはどうしてバラを赤色に塗っているの？」と言います。

「女王さまは、白いバラがお嫌いなのだよ」と5が言います。

「女王さまは、赤いバラしかお好きじゃないのさ」と7が言います。

「僕たちはバラを赤く塗らなければいけないんだ、さもないと女王さまが僕たちの頭をちょん切っちゃうのさ」と2が言います。

「あなたたちの頭をちょん切っちゃう？」と、驚いたアリスは言います。

すると突然、トランプの中の1人が「見ろよ！ 女王さまだ！ 女王さまだ！」と言います。

アリスが振り返ると、たくさんの人々が見えます。彼らは皆、それぞれが頭と手足のあるトランプのカードです。

クラブの兵隊や、ダイヤモンドやスペードの召使い、ハートやキング、そしてクイーンの子供たちがいます。

第五章 クローケー

女王は立ち止まり、アリスを見ます。

「お前の名前は何という？ 子どもよ」と女王は尋ねます。

「私の名前はアリスです」とアリスは言います。

そしてアリスは思います、「怖がってはいけないわ、彼らはただのトランプだもの」女王は庭師たちを見て「それに彼らは誰なのだ？」と尋ねます。

「私に聞かないで」とアリスは言います。

「私には分からないわ」

女王はアリスにひどく腹を立てて、「彼女の頭を切り落としてしまえ！」と言います。王は女王を見て、「でも彼女はまだほんの子供ではないか、なあ」と言います。

女王は今では庭師たちに腹を立てています。

「彼らの頭を切り落としておしまい！」と女王は兵隊たちに言います。

庭師たちはビクビクしています。

「アリス！ アリス！」と彼らは叫びます。

「どうか私たちを助けておくれよ！」

「こっちへ来て、早く！」とアリスは言います。

アリスが植木鉢の中に彼らを入れると、誰も彼らを見ることはできません。

「彼らの頭は取れているのだな？」と女王が尋ねます。

兵隊たちにはトランプが見えません。

「彼らの頭はなくなっています」と兵隊たちは言います。

「よろしい」と女王は言います。

「それではクローケーをするぞ！ お前さんはクローケーができるのかい？」

「ええ！」とアリスは言います。

「では、いらっしゃい」と女王が言います。

アリスは女王、王、兵隊たちと一緒に立ち去ります。

「自分の位置に付くのだ」と女王は叫びます。

「さあ試合を始めるぞ！」

「何ておかしな試合なんでしょう」とアリスは思います。

「ボールはハリネズミだし、木づちはフラミンゴよ。きっと難くなるわ」

試合中、女王はたびたび腹を立てては、「彼の頭を切り落とせ！ 彼女の頭を切り落としてしまえ！」と怒鳴ります。

「まあ、何てこと」とアリスは思います、「私の頭はどうなっちゃうのかしら？」

すると突然、アリスはチェシャ猫を見ます。

アリスはチェシャ猫を見て喜びます。

「ごきげんいかがかな？」とチェシャ猫が尋ねます。

「私はこの試合が好きじゃないわ」とアリスは言います。

「どうやるのか誰も分かってないし、みんな怒っているのよ」

「君は女王のことが好きかい？」とチェシャ猫が尋ねます。

「いいえ、好きじゃないわ」とアリスは言います。

王がアリスとチェシャ猫を見ます。

「お前は誰と話しているのだ？」と王は尋ねます。

「私の友達のカエデ猫です」とアリスが言います。

「私はそいつが気に入らないな」と王は言います、「だが私の手にキスをしてよかろう」

「いいえ、結構です」とチェシャ猫は言います。
王は腹を立てて、女王を呼びます。
「女王よ、この猫を連れて行ってしまえ！」
「当然ですわ」と女王は言います、「そいつの頭を切り落としてしまいなさい」
皆がチェシャ猫を見ます。
兵隊の一人が、「私はそいつの頭を切り落とすことができません、というのもそいつには
体がないのです」と言います。
「頭はあるではないか」と王が怒って言います。
「頭を切り落とせ！」
「それは公爵夫人のチェシャ猫よ」とアリスが言います。
「彼女に聞いてみて！」
「公爵夫人は牢屋の中だ。彼女をここへ連れて来い」と女王が兵隊に言います。
すると突然、チェシャ猫は姿を消してしまいます。

第六章 裁判

突然誰かが「裁判が始まるぞ！ 裁判が始まるぞ！」と叫びます。

「裁判ですって？」とアリスは尋ねます。

「それは誰の裁判なの？」

でも誰もアリスに答えてくれません。

ほどなくしてアリスは法廷にいます。

ハートの王と女王が玉座に座っています。

ハートのジャックが彼らの前に立っています。

法廷にはたくさんの鳥、動物やトランプたちが座っています。

中央には、タルトを盛った大きなお皿を乗せたテーブルがあります。

白ウサギが彼の手に長い1枚の紙を持って、王のそばにいます。

彼は読み始めます：

「ハートの女王、彼女はタルトを作る、

ある夏の日のことである。

しかし、ハートのジャック、

…彼がそのタルトを持ち去ってしまうのだ！」

「やつの頭を切り落とせ！」と女王が叫びます。

「いや、いや！」と白ウサギが言います。

「われわれはまず、何人かの証人たちの話を聞かねばなりません」

「よかろう」と王が言います。

「最初の証人を呼びたまえ」

最初の証人は帽子屋です。

彼は片方の手にティーカップ、もう片方の手にはバター付きのパンを持っています。

「これについては申し訳ないのですが、私のお茶の時間なのです」と帽子屋は言います。

「おお、まことか？」と王が言います。

「そなたの帽子を脱ぎたまえ！」

「私のではないのですよ」と帽子屋が言います。

「では、それは誰の帽子なのだ？」と王は怒って尋ねます。

「私には分かりません」と帽子屋が言います。

「私は帽子を売っているんですよ」

「そなたの知っていることを私に話すのだ」と王が言います。

「ああ、私は何も知らないのです」と帽子屋は言います。

女王は眼鏡を掛けて、帽子屋を見ます。

帽子屋は女王を怖がって、顔が真っ青です。

彼はバター付きパンの代わりに、ティーカップの一片をかじります。

「私はただの貧しい男です…」と悲しげに帽子屋は言います。

「どうか私を行かせてください、そして紅茶を飲み終えさせてくださいませ」

「よろしい、そなたは行ってもよいぞ」と王は言います。

「外でやつの頭を切るのだ」と女王は兵隊の一人に言います。

しかし帽子屋はあっという間に逃げ去り、誰も彼を捕まえることができません。

不意にアリスは妙な感じに襲われます。

「あらやだ」と彼女は思います、「私また大きくなっていったる」

「次の証人を呼びたまえ」と王が叫びます。

次の証人は公爵夫人の料理人です。
彼女が大きなコショウ瓶を持って法廷の中へ入って来ると、皆がくしゃみをします。
「そなたの知っている全てを私に言うのだ」と王が言います。
「いいえ！」と料理人が言います。
王は驚いて、白ウサギを見ます。
「証人に質問をしてください、陛下」と白ウサギは落ち着いて言います。
「おお、その通りだ」と王は言います。
「タルトは何でできておる？」
「それらはコショウでできております」と料理人は答えます。
「砂糖でできているんだよ」と眠りヤマネが言います。
「何だと！」と女王が言います。
「そのヤマネを追っ払うのだ。そいつの頭を切り落としてしまえ！」
法廷内はずいぶんな騒がしさで、ようやくヤマネは立ち去ります。
「次の証人を呼びたまえ」と王が言います。
白ウサギは長い紙を眺め、そして「アリス！」と言います。
アリスはとても驚きます。
アリスは今ではもうかなり大きくなっています。
アリスがさっと立ち上がると、何匹かの鳥や動物たちが転げ落ちてしまいます。
「まあ」とアリスが言います、「本当にごめんなさい！」
そしてアリスは進んで行き、王と女王の前に立ちます。
「そなたはこのことについて何を知っているのだ？」と王が尋ねます。
「何も」とアリスは答えます。
「それは非常に重要だ」と王は言います。
「非重要ということですね、陛下」と白ウサギが言います。
「もちろんだ」と王が言います、「つまり…非重要だ」
そして王は本に何か書きます。

第七章 お茶をしに家へ

「法廷内では静粛に！」と王が叫びます。
「そなたたちに対する重要な規則がある」
皆は静まり返り、王を見ます。
王は本を開き、読み上げます、「規則 42 条。1 マイルの背丈より高い者は皆、法廷から退出せねばならぬ」
皆がアリスを見ます。
「私は 1 マイルの背丈もないわよ」とアリスが言います。
「いや、ある！」と王が言います。
「お前は 2 マイルより高いぞ」と女王が言います。
「私は法廷から出て行きたくないわ」とアリスは言います。
「それは本当の規則じゃないもの」
「それはとっても古い規則なのだ」と王が言います。
「それじゃあなぜ規則 42 条で、規則 1 条じゃないのかしら？」とアリスが尋ねます。
王は何と言っているかわからず、いそいそとその本を閉じます。
白ウサギが飛び上がり、「見て下さい、手紙があります！」と言います。
白ウサギは眼鏡を掛け、手紙を見ます。
「おや！ 手紙ではありません、詩です」と彼は言います。
「それを始めから読み、そして終わりで止めるのだ」と王が言います。
白ウサギはその詩を読みますが、誰もそれを理解しません。
「この詩はばかげているわ」とアリスが言います。
「おお、ジャックの頭を切ってしまえ！」と女王が言います。
「何てばかばかしいことを！」とアリスは大声を出します。
アリスはとてとても大きくなっているの、今やもう誰も恐れていません。
「静かにしろ！」と女王が叫びます。
「嫌よ！」とアリスが叫びます。
女王はひどく怒り、顔が紫色になっています。
「彼女の頭を切り落とせ！」と女王が怒鳴ります。
「あなたたちのことなんか怖くないわ」とアリスは言います。
「あなたたちはただのトランプだもの！」
すると突然トランプたちが宙に舞い上がり、彼女の上に降りかかってきます。
「あら、まあ！」とアリスは言います。
アリスは顔からトランプたちを払いのけます。
アリスは目を覚まします。
そのトランプたちは木の葉なのです！
アリスのお姉さんはアリスの顔からそれらを払いのけます。
「起きて、アリスちゃん！」とアリスのお姉さんが言います。
「まあ、何て変な夢なのかしら！」とアリスが言います。
「私にそれについて教えてちょうだい」とお姉さんは言います。
アリスはその夢についてお姉さんに話します。
お姉さんは聞いて、笑います。
「そうね」とお姉さんは言います、「とっても変わった夢ね。でももう遅いわ、それにお茶の時間よ」

アリスは家にかけて行き、そして白ウサギ、イモムシ、公爵夫人、帽子屋、チェシャ猫、クローケーの試合、女王、王、そしてトランプたちのことを思います。

「何てすてきな夢なのでしょう！」とアリスはうれしそうに言います。

「いつの日かそれについて、私の子供たちに話してあげられるわ」